

■これからの長野県教育を考える有識者懇談会（第3回）

日時：令和4年7月4日（月） 午後3時～午後5時

場所：県庁西庁舎 301号会議室 WEB（ZOOM）併用

1 開 会

上平企画幹

それでは、お時間の前ではございますが、皆様おそろいですので、始めさせていただきますと思います。ただいまから第3回「これからの長野県教育を考える有識者懇談会」を開催します。

本日は、おおむね17時を目途とさせていただきますと思いますので、よろしくお願いいたします。

2 教育長あいさつ

上平企画幹

開会に当たりまして、長野県教育委員会教育長、内堀繁利から挨拶を申し上げます。

内堀教育長

皆さん、こんにちは。

第3回の「これからの長野県教育を考える有識者懇談会」を開催しましたところ、村松座長様をはじめ、構成員の皆様には、お忙しい中、御参加を賜り、誠にありがとうございます。

5月13日付をもちまして、教育長に就任しました内堀繁利でございます。どうぞよろしくお願いたします。

この有識者懇談会は、昨年10月に立ち上げまして、これまで2回の会議を行っていただきました。2回目から今日の3回目まで、少し間が空いたわけですが、この間、公私立の小中高、特別支援学校等を訪問したり、政策対話を行うなどして、様々な方から意見を聴取してまいりました。そういったものも今日の資料の中に入っておりますので、またそういったものも踏まえて、御議論いただければと思います。

それから、資料の中ですけれども、基本理念・計画構成についてということで、この後、説明がありますが、例えばということで、事務局から提案をさせていただいております。そのコンセプトとしては、教育基本計画というものはこういうものだから、こういうふうにはやらねばならないというような枠組みを超えて、県民の皆様が長野県教育が今後どうあるべきかということを知りやすく、また、納得いただけるようにお示しすることが大事だという考えに基づいて、恐らくこれまで都道府県レベルでは、あまりそういうまとめ方をしたことはないであろう例も提案させていただきたいと思っています。

また、参考資料の中に、県の5か年計画の審議状況ですとか、特別支援、生涯学習、スポーツの関係の審議会等での議論もつけさせていただきました。

そういったものも含めて、参考にさせていただきながら、御意見をいただければと思っております。この有識者懇談会は、様々なお立場の様々な方に御参加いただいております。それは

どういう意味かという、例えば知見ですとか、見識ですとか、そういったこともそうですけれども、それぞれの方がこれまでに様々な御経験をされたり、様々な思いや考えを教育に対してお持ちであると思しますので、それを1人の県民として、あるいはそれぞれのお立場から忌憚のない御意見をいただきたいという趣旨でございます。ですので、こんなことを言ったらいけないとか、これは言わないほうがいいのか、そういう付度は一切要りません。思ったことを率直にお話しいただくことが、我々にとってもありがたいことだと思っておりますので、そんな御理解の下、御発言をいただければと思います。今日はどうぞよろしく願いいたします。

上平企画幹

それでは、最初に、当懇談会を立ち上げてから、初めて御出席された有識者の方を御紹介いたします。高見澤秀茂様でございます。

高見澤構成員

高見澤でございます。よろしく願いいたします。

上平企画幹

ありがとうございました。

なお、本日、マキナリー様、北條様はウェブ参加、松田様は途中からの御参加となります。大室様は、所用のため欠席との御連絡をいただいております。

続きまして、本日の配付資料の確認をさせていただきます。お手元の資料を御確認いただきたいと思っております。

次第、名簿、座席表。

資料1としまして「これまでの経緯、いただいたご意見等について」。

資料2としまして「基本理念・計画構成について」。

参考資料1としまして「総合計画審議会における審議状況」。

参考資料2としまして「次期長野県特別支援教育推進計画の策定について」。

参考資料3としまして「第12期生涯学習審議会審議状況」。

参考資料4としまして「第3次長野県スポーツ推進計画について」でございます。

以上の参考資料は、長野県総合計画の策定の審議状況と教育委員会事務局内の審議会等において、今後の施策を個別具体的に検討している分野がございますので、それらの検討状況を共有させていただきたいと思っております。

今回、こちらに関する議論は行いませんので、お手数ですが、後ほど御確認いただくよう、お願いいたします。

最後は、参考資料5といたしまして、第2回の本会議の議事録となります。

以上でございます。よろしいでしょうか。

それでは、議事に移りたいと思っております。

議事の前に、ウェブで御参加いただいている参加者の方をお願いを申し上げます。通常時

はマイクをオフにいただきまして、発言の際は挙手をしていただきまして、マイクをオンにして御発言をお願いしたいと思います。発言が終わりましたら、またマイクをオフにしてください。よろしくお願いいたします。

それでは、会議の座長は、前回に引き続きまして、村松様をお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

上平企画幹

それでは、村松座長、どうぞよろしくお願いいたします。

3 会議事項

(1) 事務局説明

- ・これまでの経緯、いただいたご意見等について
- ・次期長野県教育振興基本計画の基本理念・計画構成について

村松座長

それでは、第3回の懇談会を始めさせていただきたいと思います。

本日は、こちらの会場の皆さん、ウェブのほうでも、都内、それから、お聞きしますと、海外からもということで、非常にワールドワイドな議論ができるのではないかと期待しております。内堀教育長からも御挨拶がありましたように、いろんな角度から、ぜひ様々な御意見をいただければと思っております。

それでは、議事に入りたいと思います。

まず意見交換に入る前に、会議事項1「これまでの経緯、いただいたご意見等について」及び「次期長野県教育振興基本計画の基本理念・計画構成について」事務局から御説明をお願いいたします。

松本教育政策課長

教育政策課長の松本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私から、資料1、資料2、10分ぐらいで御説明をさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

着座にて説明させていただきます。

本日、皆様から御意見等をいただきたい点は2点でございます。一つは、計画の基本理念につきまして、二つ目は、計画の構成についてでございます。いずれも事務局から例示をお示しさせていただいておりますけれども、これにこだわらず、もっとこうしたほうがいいのか、また、もっとこういう表現のほうがいいのかなど、自由に御意見、アイデアをいただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、まず資料1をお願いいたします。「これまでの経緯、いただいたご意見等について」でございます。

簡単に昨年度の懇談会を振り返ります。1 ページ目でございます。

第1回目では、子供の多様化や教職員の多忙化などが進む中、学校のみでの個別課題への画一的・対処療法的な対応には限界があり、表面化している様々な課題の根本原因を捉えた方向性の検討が必要とされ、探究を中核とした子供目線に立った学校づくりという方向性に御賛同いただいたと認識しております。

また、第2回目では、内閣府の合田審議官をお招きいたしまして、第1回の方向性を踏まえまして、学校はどのように変わっていかなければならないのか、これまでの日本教育の歴史からひもとき、御講演をいただいたところでございます。

学校は全ての分野・機能を丸抱えし、同質・均一的な人材育成をすることから、社会や民間の力を活用しながら多様性を重視したものへ変わっていかなければならない。

また、急激なデジタル化が進む今こそ、制度や学校の形といった面で構造的な変革も可能になってきているという御発表がございました。

裏面をお願いいたします。昨年度2回の懇談会を経まして、今年度に入りまして、5月から6月にかけて、私どもは意見交換をいろいろなところでさせていただきました。今回の懇談会を開催するまでに様々な方々と意見交換、また、視察なども含めて、情報を収集してまいりました。

そちらに「《主な意見》」と記載をしております。

計画の理念などについては、やはり探究を据えてほしいというもの、また、その探究そのものに対する御意見がございました。

学校現場からは、現場の働き方改革、魅力向上のためにはどうしたらよいのかといったこと、また、私立や様々な学びの現場の皆様からは、どのように連携をしていったらよいのかという意見をいただきました。

また、学校に伺って児童生徒と意見交換をしたり、オンラインにて政策対話ということで、6月14日に中学生から大学生まで約10名の子供・若者の皆様から直接学校や学校の学びに対する思いを伺った内容を記載させていただいています。特に一番最後の「子ども・若者から」というところは、子供・若者たちの直接の意見でございます。

これまでの振り返りは以上でございます。

続きまして、資料2をお願いいたします。「基本理念・計画構成について」をお願いいたします。

これまで皆様と認識を共有してくる中で、また、様々な皆さんと意見交換をしてきた中で、キーワードとなる探究、探究力、そして、well-being について、参考までに様々な場で言われている表現などを記載させていただいております。

例えば仮に目指すべき未来を「個人と社会の well-being の実現」であるとか、「多様な個人の幸福やよりよい社会の実現」とした場合、このような未来を実現していくために必要な資質、それは探究力であると考えております。

目指すべき未来の実現に向け、子供たちが探究力を身につけていくためには、長野県は今後5年間でどのような理念を持って取組を進めていくのか、これが本日御意見をいただいたテーマの一つです。

括弧書きで記載させていただいたのは、これまでの議論を踏まえ、私どもで一旦挙げさせていただいた例示です。

真ん中から下ほどのところに「長野県教育振興基本計画 基本理念」とございます。「(出る杭を育む信州教育～個性を伸ばし、『楽しい』をとことん追求～)」であるとか、「(一人ひとりが、長野県、日本、世界、地球の未来を創るチェンジメーカー)」(「幸福・笑顔・夢・希望が満ち溢れている『探究県』長野の学び)」これは一旦例示とお考えいただければありがたいです。

こういった基本理念に基づいて、具体的な取組の柱となってくるのが重点目標として記載のある三つでして、今、想定をしているところでございます。

一つ目は「一人ひとりが自分にとっての『well-being』を実現できる学校をつくる」。

二つ目は「一人の子どもも取り残されない『多様性を包み込む』学びの環境をつくる」。

三つ目は「生涯にわたり大人と子どもが学び合える地域の拠点をつくる」です。

本日は限られた時間でございますので、目指すべき未来を見据えた計画の基本理念について、アイデア、御意見をいただければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

次に計画の構成についてです。ページをおめくりください。

まず現状でございますけれども、第2次計画、第3次計画では、計画の策定の基本的な考え方、情勢、これまでの取組、方向性、今後5か年の施策及び推進体制といった6点で構成されているものが一般的な行政計画のなりになっています。

また、一番右側に成果指標を掲載しております。43項目にわたる成果指標を設定して、毎年度、達成状況について評価を行っている状況でございます。

次のページをお願いいたします。「○例えば…」というところでございます。今度の第4次の計画の構成としまして、三つの案を提示させていただきました。

一つ目は、一番左でございます。これまでの構成を踏襲しつつ、さらに今回の計画の中心に据えようとしている探究の部分のパートを新たに設けるものでございます。

真ん中、二つ目の案でございます。こちらは計画の記載を基本理念や目指すべき姿、そして、施策の大きな方向性、指標の考え方、指標一覧までとするものです。理念や大きな方向性までを分かりやすくまとめるもので、様々な場の多くの皆様との共有が広く、また、深くできるのではないかと考えております。個別具体の取組、事業といったものは、毎年度行っている点検評価の振り返りや予算編成に合わせてまとめる施策体系、事業一覧、そういったものを活用しながら、毎年まとめていきたいと考えております。

一番右側です。県の最上位計画である長野県総合5か年計画において、その教育の部分を教育振興基本計画に位置づけるものです。このような形を取っている他県の例もあるため、参考までにお示しさせていただいております。

先ほど御説明申し上げた基本理念と、ただいま説明申し上げた計画の構成の2点について、多くのアイデアや意見をいただきたいと思っております。

なお、今後は本日いただいた意見を基に、基本理念、計画全体の構成を固め、10月頃、第5回をもって提言としておまとめいただきたいと考えております。それを受けまして、教育委員会で年度末までに計画という形に持っていきたいと考えておりますので、どうぞよろし

くお願いいたします。

私からの説明は以上です。

村松座長

御説明ありがとうございました。これまでの様々な会議等での意見、非常にうまく集約いただきまして、ありがとうございます。

(2) 意見交換

村松座長

それでは、具体的な議論に入ります前に、今回初めて御参加いただいております高見澤様から簡単な自己紹介もいただきながら、この懇談会に対する所感、今回の資料等を御覧になってお感じになったことをまず最初にいただければと思います。高見澤様、よろしくお願いいたします。

高見澤構成員

このような時間をいただきまして、ありがとうございます。

株式会社高見澤という会社の社長をやっております、高見澤と申します。よろしくお願いいたします。

出身団体は中小企業団体中央会という、中小企業の集まりの組合等を統括している県の組織です。そこの副会長をやっております。

実は偶然ですが、村松先生とはもう 20 年ぐらい前になりますが、ロボコンのほうで子供たちが大変お世話になりまして、ここでお会いすることになりまして、非常に幸運であります。

今、経済界では、やはり「企業は人なり」ということで、人手不足が一番大きな問題になっております。その中で、加藤市長が 1 期目のときですから、もう 7～8 年前になるかと思えますけれども、信毎の調査で長野市内の高校生にアンケートをしたところ、大学を卒業して長野県に帰りたいと考えている高校生が 3 分の 1 もいなかった。これは当然産業界にも大きな問題がありますし、環境等もあると思います。ただ、高校生ですから、教育の部分も多分にあると考えておりました。

そのときに、長野日本無線という会社が東京から引っ越してきました。研究部門が 1,000 人単位でこちらへ移住するというので、市にとっては非常に大きなことだったのでけれども、そのときに、家族連れで社員の方が見えるということで社宅を用意しました。ところが、ほとんど単身です。その理由の 1 番目が長野にはいい学校がない。筑波だったらいいけれども、長野では駄目だという意見です。非常に厳しいと思いました。

それよりももうちょっと前ですが、ISAK の小林りんさんの話が経営協でありまして、お話を聞いたら、これからは自分の経験も含めて、世界に通用するリーダーとなれる人材をつくりたいということで、軽井沢に少人数で学べる学校をつくりましたとおっしゃっていました。

その後、今、こちらにもいらっしゃいますけれども、風越学園さんが学校をつくられて、実は都会からの移住者が多く来てございます。これは非常に県にとってはいいことだと考えております。

いずれにしても、先ほど探究という話がありましたけれども、子供たちも興味がなければ探究もできないと思いますので、そういう環境づくりをするにはどうしたらいいかということを考えながら、勉強させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

村松座長

ありがとうございました。

今いただいた意見を含めまして、この後、議論を進めていきたいと思います。

まず最初に、先ほど事務局から説明いただいたうちの基本理念について、検討を進めていきたいと思います。

また、資料1の2枚目に示されている様々な意見につきましても、補足や追加、記載内容についての御意見がありましたら、関連して御発言願えればと思います。

資料1でいくと、ポイントになってくるのが探究、あるいは探究力、それから、well-beingの話、そして、これをどう学校現場に落とし込んでいくのか、あるいは県民にどうやって伝えていくのか、こういったところがポイントになってくるかと思います。

それでは、御意見がある構成員の方から御自由に発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。

それでは、学校現場のお立場から少し御意見をいただけたらと思います。西片様、いかがでしょうか。

西片構成員

お願いいたします。

探究ということは、私も現場にしながら、ずっと考えながら、子供たちを見てまいりました。幼児期に一つのことを追求してできる子というのは、将来、自分のことを考えながら、いろいろなことに挑戦できるということを、今、改めて実感しています。卒園して何年もたった子供たちが、それぞれの場で自分らしく自分を発揮しながら活躍しているということを新聞等で目にすることが多くあります。一番の基となるやってみたいと思うことというのは、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学、社会へと、ずっとつながっていくのではないかと思います。「やってみたい」と思うことが探究の一步だと感じています。その中で、学び合うということ、それから、自ら問いを立てて答えを見いだすという、そこら辺が一番大切なのだと考えます。

現場の具体的なお話をしてもいいでしょうか。アメリカシロヒトリが木にくっついていました。子供たちは大騒ぎで、毛虫がいる、これは何のチョウチョウになるのだろうと見ていたので、私がこれは毛がいっぱい生えているからいい毛虫ではないと言いました。その横にヒョウモンチョウの幼虫がいたので、その幼虫を子供たちはすごく楽しみにしていたのです。そして、これはもしかしたら潰さないで駄目かもしれないと言ったら、子供たちが、「ちよっ

と待つ。園長先生の言うことは分からないから、〇〇君を呼んできて」と言うのです。私が手で持ったら危ないと言っているのに、子供たちは〇〇君を呼んできて、これは確かにあまりいい毛虫ではないという話をして、それから図鑑を調べて、これはどうなのだろうかと自分たちで疑問に思うのです。図鑑を調べて、ああだこうだ言いながら、やはりあまりいい毛虫ではなかったとなったら、その男の子は何とこれは潰してしまったほうがいいのかという結論に達する。

そのプロセスを見ていたときに、本当に小さな子供でも、ちゃんと自分たちでどうしていったらいいのだろうか、もし飼うのだったら、どういうふうにしたらいいのだろうかということを話し合う、現場の中ではとても多く起きている。そこがすごく先々につながっていく探究心だと感じています。

子供が面白いがる、その子供を見て先生が面白いがる、子供と一緒に語れる環境はやはり必要なのではないか。受け止めることにより、子供たちは「〇〇君の言ったとおりだった」と言い、教師も「そうだね」と認める、〇〇君も自己肯定感がすごく高まって、先生はやはりぼくの事知っていたねみたいという顔で返してくれます。今のことは一例ですけれども、日常茶飯事、そこらじゅうに転がっている。それが探究心の一番基となる問い続ける、探し続ける遊びみたいな感じだと感じております。

村松座長

ありがとうございました。今、園児、子供たちも探究心を持って探究に取り組んでいく、そんな事例等も御紹介いただきました。

続きまして、小学校の松谷様、いかがでしょうか。

松谷構成員

お願いします。

今年度、学校が替わりまして、その学校では、個々の子供が1人ずつ、それぞれアップデートということを研究主任が言うておりました。私自身も前回の合田審議官の話をお聞きして、教育とはこういうふうに変わっていかねばいけないのだと、すごく刺激を受けさせていただいて、今、本校で子供たち一人一人が自分のペースで、自分の方法で学ぶということについて進め始めています。学びの改革支援課さんでも学びのフォーラムをやっていたら、そういうものも参考にさせていただいて、今、単元内自由進度学習を試み始めました。

5年生の子が算数の授業が終わるとき「ええっ、もう終わっちゃうの？もうちょっとやりたかったのに」と言っています。算数と言うと「ええっ、嫌だ」と言うのではなくて、そういう言葉が出始めています。

合同をかくというところを学んでいたお子さんがいました。その子は、底辺をかいて、角を測って長さを取る。もう一方も角を測って長さを取る。そうすれば、三角形の合同ができると思っていました。実際にやってみたら、底辺をかいて、片方の角を測って、長さを測ったらできてしまった。「これでできちゃったんだ」と非常に不思議そうな顔をしていました。

また、ある子は、底辺を書いてコンパスで長さを取ってできていました。でも、教科書に

は定規を二つ合わせてその接点をどうするかという図があったので、それでやらなければいけないのではないかと思って苦勞していました。見かねた私が「進んでいる子に聞いてみたら」と言ったら、その子は進んでいる子に聞いて、「あなたのやろうとしていることは、自分でコンパスでかいたのと同じことだ」と言われて、自分のやっていたことはこれと同じだったのかということ自分で納得している姿がありました。そうやって先生が教えるのではなくて、自分で学んでいるとき納得というのが子供たちにすごくあるということを感じさせていただきました。

4年生の社会で、見学へ行った後、まとめをタブレットを使ってやっていました。その後は個々に進度差がありますので、早く終わった子たちは、自分でタブレットを通してYouTubeを見たり、NHK for Schoolを見たり、見学に関わる場所をさらに深めているという姿がありました。見学のまとめがゆっくりな子はゆっくりのペースで、早く終わった子はさらに自分で深く学ぶことができました。1人1台のタブレットを貸していただくことで、自分で調べてやっていくという姿が見られてきて、どの子も真剣にそれに向かっていました。

まだ端緒にいるところでもありますので、一斉の学習もまだまだありますが、そういう目で一斉の授業を見てしまうと、子供たちが、今、活動しているのに、先生が「ここでやめ」と言ってしまった、子供はまだやりたがっているのに止められてしまった、思考を止めてしまったのではないかと、聞きなさいと言っても、本当に聞く必要がその子にはあるのだろうか、自分のペースではなくて、全体のペースでいくとロスのある時間があるのではないかと、学んでいる時間はどれだけなのだろうか、逆にそんなふうにも見えてきてしまっている自分もいます。

今の事例からいうと、子供たちは本当に学ぼうという気持ちをいっぱい持っていると感じます。ですから、私たちはどういう授業をしてやらなければいけないのか、今までやっていたもので立ち行かないということをつくづく思い、子供たちが学び育っていくことについて、授業改善をしていかなければいけない。そのときに、やはり研修をしていかなければならないと思っています。

私たちも、今回、合田審議官さんの話を聞いたり、県の研修で話を聞いたり、あるいは先進の取り組みをしている学校の話の話を聞いたり、視察をさせてもらったりということ少しづつやっています。ただ、多くの先生が言っていることは、イメージが湧かない、どうやったらいいのか分からない、本当にこれでいいのだろうか。教えることをやってきたので、今ジレンマになっています。

また、職員も本当に子供たちの身についているのだろうか、そこら辺はまだ検証できていないところがありますので、不安もあります。そのようなところで研修の大事さも感じています。

また、地域の方たち、保護者も含めてですけれども、やはり一斉学習で学んできた世代でありますので、その方たちにどういうふうに伝えていくかということも一つ課題だと思っています。

学校運営協議会のところで、御年配の方がこんな発言をしていました。「子供たちが自分なりのやり方で、タブレットを使って漢字をやっているときに、その子その子のやり方でやる

なんていいのだろうか。でも、今回、説明を聞いてそのよさが分かった」と言われていたもので、周知も必要だということを感じます。

先ほどの事例ではないのですけれども、子供たちが自分のペースで自分らしく学べた、分かった、できたという喜びが子供にとっての well-being になり、また、そうやって自分のペースで納得して学ぶということも探究になっていくと感じています。

以上です。

村松座長

ありがとうございました。今の自由進度学習は自分のペースで納得しながら学んでいく、それが子供たちの well-being につながっていく。その一方で、こういった学習のイメージをどうやって持たせていくのか、あるいは地域の方々はどう伝えていくのかという、そういった課題とともに御提起いただきました。

ほかはいかがでしょうか。そうしましたら、岩瀬様、いかがでしょうか。

岩瀬構成員

軽井沢風越学園の岩瀬です。

今回、探究を真ん中に据えるということは、私はとても共感しています。それは大きく学習観を転換しようという提言であり、つまり知識を詰め込んでスキルを習得という学習観から、探究とそれを伴う対話を通じて自分で知識をつくり出していく、そして、社会を変えていくという、そのプロセスに注目していこうという構成主義的学習観への転換ですから、それを大きく真ん中に据えるということには賛成したいと思います。

本校を外から見ると、とてもうまくいっているように見えると思うのですが、順調に問題だらけで、日々悩んでいるわけです。学校の存在意義というか、学校に欠くことのできない本質は何かということ最近よく考えます。個別に学ぶ、一人一人の個別最適な学びをするのは、何も学校でなくてもよさそう。学校であることの意味、本質は何かといたら、その一つは「他者がいること」です。

個人的な活動ではなくて、実践の共同体に参加するということ、他者を介して自分のよさに気づいていく、対話を通して探究を深めていく、そういうコミュニティーに参加することが学校の本質だと考えると、今回の基本理念の中に学校の他者性というか、コミュニティーに参加するということはどう織り込んでいくのかということは、大事なポイントだと考えています。

二つ目は、探究、探究者というときの主語は誰かという話ですが、先ほど「先生たちもチャレンジしたいのだけれどもイメージが湧かない」というお話がありましたが、自身が経験してきたことのない学びを実践するというのはすごく難しく、そこで踏み出せなかったり、今までのやり方に戻ってしまうということは、学校現場で結構多いのではないのでしょうか。先生自身も未知の実践、未知の学校の形、未知の教育を探究し、学校の新しいカタチを明らかにしたいという、「探究者としての教師」みたいなことも視野に入れたいと思います。

先生自身が探究者になっていかない限り、子供が探究的な学びをすとか、学級が探究なコミュニティーになっていくことはないわけで、今回の基本理念、または重点目標の中に、現場にいる先生たちへのメッセージになるような、先生たちこそが探究者になっていくのだ、今までのことを問い直して新しいものをつくっていくのだというメッセージ、学校改革の主語なのだというメッセージを入れたいと思っています。

三つ目は、探究力という言葉はどう捉えるかは結構悩ましいと思っております、先ほど西片さんのお話で出た探究心という言葉は結構大事なキーワードだと思っています。未知のことだったり、気になることだったり、いてもたってもいられないことを何が何でも明らかにしたいという気持ち、それが探究心だと私は考えていて、幼児の頃、それは自然に出ているのです。でも、なぜか小中と上がっていくにつれ、その探究心みたいな、明らかにしたいみたいな気持ちがちょっとずつ弱まっていってしまう感じがしています。その探究心を抜きにした探究力と言ってしまうと、力だと捉えがちなので、そこをどう定義するのかということを進めたいと考えています。

風越でも幼児は日々めちゃくちゃ探究して暮らしているのですけれども、中学生から風越学園に入学してくる生徒もいて、例えばその子たちは個人探究の時間になっても、こんなことをやってもいいのかとか、自分はこれに関心があるのにこれは学びと言えるのか。みたいなところで逡巡しスタックしてしまうことがあるのです。なぜ幼児の頃と中学生の頃にそういう乖離が起きてしまうのか。そこには探究心という、明らかにしたいみたいな気持ちがどれくらい育まれているかということが結構大きいのではないかと最近考えています。その辺りは、探究力ということ置いていく上で、もう少し議論を詰めていきたいと考えています。

以上です。

村松座長

ありがとうございました。今回、探究、これが学習観の転換につながるという非常に大事なお話、それから、御指摘も様々ありがとうございました。コミュニティーへの参加のこと、子供たちだけではなくて、教師自身が探究に取り組んでいく、その必要性のお話、それから、先ほどのお話にもありました探究力と資質・能力、ここの部分を議論する上で、探究心というのは非常に重要ではないか、そんな御指摘をいただいたかと思います。

続きまして、安藤様、いかがでしょうか。

安藤構成員

私、私立の中学、高校の協会という立場から来ているのですが、長野県は高校が主でございます。高校年代になるというのは、中学校から高校へというところで、恐らく初めて自分で選択をするといいますか、どこの学校に行こうかという、学校名で選択するケースもあれば、どんな勉強をしたいのか、何をすることが自分を生かすことにつながるのか、できればそちらへ主流がいけばいいのですけれども、いずれにしても、中学校段階から選択をするという大きな機会を通して教育現場に来るといって、こういう背景の中で私たちはいます。

ですので、15歳辺りから学ぶ生徒たちもある程度ターゲットを持ってきている。我々はタ

ーゲットの先、選ぼうとする選択肢がどのくらいあるのかということです。私も探究という学習についての理解がまだ薄くて、決めつけてはいけません。恐らく自分が学びたいという、その中で探究という、自分の力でそれを深めていくという、それにはやはり15歳の子たち、14歳の子たちがいる環境というのが、豊かな選択肢といえますか、多様な選択肢といえますか、そういうところでできるだけいてもらいたい。

そういう点では、私立も公立も垣根なく、豊かな選択肢が存在する。そんな環境の中で、自分の学びたい探究というところを深めていくという、こういう道筋。

もう一つは、well-being ということで、個人と社会というときに、両立する、個人個人のwell-being と社会に対しての well-being というものが矛盾なくつながっていくような、そういう学校環境。

今、私がお世話になっている学校は、入ってくる生徒さんのスタートラインは様々です。学校への依存度とか、あるいは学力とか、学校に来られる日にちの数とか、あるいは人との接し方などのスタートラインが全くばらばらで、とても画一的な形ではいけない。まずはばらばらであることを許容してあげること。そこから始まって、自分で選んできたのだけれども、自分の最初の選択がうまくいかなかったときに、もう一回、柔軟に変更も受け止めてあげられるような、あるいは目指していた学校生活と違う形態になっても、そこできようならしなくてもつながっていられるような、そういう面での柔軟性といえますか、そういう中で自分でやりたいことが見えてきたという生徒さんが何人かいると思います。

それは一つの学校でなくても、全体の環境としてそういうものがあるような、15歳から17歳の若者が学ぶ環境として、そういうものが必要だと思います。

すみません、長々としゃべりましたが、今は本当に多様な選択肢が全体としてはあるわけですけれども、彼らが住む地域の中で、良質で多様な選択肢があって、また、そこが柔軟に開かれた社会である中で、探究という学習、あるいは自分自身にとっての well-being が社会に対しての well-being につながるような、柔軟な行き来ができるような、そういうものを目指してもいいのではないかと。

先ほど高見澤さんからいい学校がないというお話がありましたが、そういう点でも、一つの学校でつくらなくても、地域としてつくるような、そんな考え方もあっていいのではないかと感じます。

以上です。

村松座長

ありがとうございました。選択肢の多様性のこと、そして柔軟さ、最後にお話しいただきました個人と社会との well-being の両立、これはそれぞれどちらか択一のものでなくて両立していくべきだろう、そこに向かってといったお話だったかと思います。

続きまして、小金様、お願いできますでしょうか。

小金構成員

このたび異動しまして、長野西高に行きました小金と申します。よろしく申し上げます。

今、お聞きしているお話の中に幾つか重なるところがありまして、4点考えました。

1点目ですけれども、探究ということが私自身もやりたいし、学校としても進めたいところですが、「3. 意見交換 (R4年5～6月実施) の概要」を読ませていただいたら、『探究』について」の二つ目のポツのところ、「学校全体で支える体制をつくる必要がある」という一節があるのですが、学校間、あの学校はこうやってやっているらしい、この学校はこうやってやるらしいという情報は割と入ってきたりするのですけれども、そうすると非常に焦るところがありまして、うちはどうしようという焦りが出てきます。学校全体で支える体制というよりは、県全体で支えていただけのような体制をつくる必要があります、多分それが今回の基本理念になってくると思っています。

探究をやるための理由、本当に原点に戻るのですけれども、これをやはり生徒にも、職員にも示していかなければいけない。同じよう話が出ていましたが、納得できていない先生方が非常に多くて、特に年配の先生方は頭が追いついていなくて、何で探究をやらなければいけないのでしょうかというところがまだ腹に落ちていなくて、どうも煮え切らないようなことになっている。あの人材がいるからできた探究は続いていかないの、学校間の競争ではなくて、県全体でいろんなものを示していければいいと思います。

それから「多様な主体との連携について」のところに「学校と地域・専門人材をつなぐコーディネーター」という言葉が出ていて、大変に欲しいと思いました。今までも何とか探究を進めようとして、地域の人材を探すのですけれども、同窓会とか、地域の行政に行って求めたりしたときに、笑って流されてしまったり、困ってしまわれたりして、なかなかうまくいっていませんでした。腰を据えて理念から話して、じっくり話していけばいいのでしょうか、時間だけが過ぎていくので、つついいうまくいかないままで放ってきいているので、コーディネーターは必要だと思っています。

3点目ですが、「子ども・若者から」の下から3番目のポツで、「夢や好きなことが見つかるきっかけをたくさん作ってほしい」という一言があるのですけれども、これは探究にとって必要なことで、先ほど来、探究心を持つということとか、多様な選択肢を示していくとか出ているのですが、本当に探究は必要だと思うのですが、実はきっかけを示すのが今のところ一番難しく、私どもは困っているところです。探究をやろう、スタートしようといったときに、先生方がまずぶち当たる壁は、どうやってきっかけをつくりましょうかということが思い浮かばないところで困っているのが実情です。

最後4点目ですが、こういう基本理念を示そうとしたときに、何度もお話の中に出ていまして、県民がイメージを共有できるものというところ、ここが大事だと思っていて、言葉が大切だと思っています。

言葉の持つ力は非常にすごいもので、その言葉一つでみんながやる気になったり、やる気を失ったりする繊細なところですが、ただ、言葉というのは難しくあるべきではないと思っていて、シンプルでストレートで、でも、心を揺さぶるようなもの、あと、どの世代でも分かる言葉。この頃、同窓会等、外に行っているいろんなことを説明する機会があるのですが、「難しい言葉を言われても分からない」と言われてしまうので、どんな世代にも伝わるような言葉を使っていくことが大事だと思います。市井で普通に飛び交うような言葉で説明でき

たらいいと思いました。

以上です。

村松座長

ありがとうございました。今、学校全体で支える体制の大切さ、とりわけ年配というお話もありましたけれども、なぜ探究をというイメージを共有して、先ほどのお話に出た腹に落ちるというか、そういうところまで理解を深めるというのは、今回の理念の一番大きな課題だということは、私も聞いていて感じたところでございます。

また、生徒にきっかけを示すのが難しい。先ほど岩瀬様からも似たようなお話がありましたけれども、どうやって探究心を持たせ、進めていくのかという部分はまた検討が必要だと思います。

最後にいただいた県民がイメージを共有するというのは、この後の計画の構成の話にも関わってくるかと思えます。どうやって分かりやすくするか。先ほどシンプルでストレートで各世代にも届くというお話がありましたが、本当にそこまでできたら素晴らしいという、こういうところは、この後ぜひ検討を進めていければと思っています。

今度は特別支援教育の立場から、松嶋様、お願いできますでしょうか。

松嶋構成員

安曇養護学校の松嶋でございます。お願いいたします。

今まで委員の皆様のお話を聞いている中で、探究ということを中心に据えて考えていくということは、私も大賛成であります。その中で、子供を主語にしてということ、それから、岩瀬さんから協働探究者という言葉が先ほど出されましたが、そこにも関わりながら、特別支援学校の様子も含めてお話できればと思います。

県内の特別支援学校では、一人一人の可能性が最大限に発揮できる、そんな学校づくりをしようということで、教育委員会も含めて、今、みんなで取り組んでいるところですが、そういう中で、探究ということや well-being というところと重なってくるものが大きくあると感じています。できるだけ子供たちや先生方、職員にも分かりやすく探究ということを伝えたいと思います。言葉は重ならない部分もあるかもしれないのですが、大切に考えていることは、「自分から、自分で、精いっぱい活動できる」、そんな子供の姿を願うことということ、それから、子供が「分かる、できる、もっとやりたい」と思える学習にしていこうと進めているところです。できるだけ簡単な言葉で共有できればと思います。

子供たちが生活する中で、もっとやりたい、小学校の子供だったら校庭でもっと遊びたい。そして、その中で、自ら工夫して遊ぶ姿ですとか、そういう姿が多く見られるということから考えると、長野県が目指していこうとする姿と重なるのではないかと考えているところです。

ただ、日々の中で気をつけていかなければいけないといえますか、課題になる部分は、教員の指導観にもつながると思うのですが、できないことをできるようにさせるという、子供に対してそういう意識で指導・支援していくのと、子供の可能性といえますか、子供がここ

まではできる、だから、こんな支援をすることでもっとできるようになるのではないかと、子供がもっと自分から活動できる、こんな姿になるのではないかと考えるのとでは、大きく違ってくるのだらうと思います。

そういう中で、先ほど協働探究者という言葉が聞かれましたが、特別支援学校では大分前から共同生活者という教師の立ち位置を大事に、子供とともに学校生活を過ごす中で、子供の課題を子供自身が課題として捉えて、そして、自分で取り組めるように、その支援をどう教員はしていくのかというところ、その環境づくりが非常に難しいところですが、そこに力を入れていこうということで頑張っているところです。

今後は、教員はオールマイティーではないので、いろんな意味での外部の方の力を借りながら、子供の支援に生かしていくことが大事になるのではと考えています。そういう意味で、探究という言葉を大事にしながら、そして、これが先ほども出ましたが、県民の方も含めて、みんなに分かりやすい、伝えやすい言葉ということ、内容を考えながら示していけるのではないかと考えています。

以上です。

村松座長

ありがとうございました。子供を主語にということ、それから、支援の在り方、共同生活者というお話もありました。そして、先ほども出ましたが、分かりやすい言葉で伝えていく、その重要性等を御指摘いただいたかと思います。

今度は保護者のお立場から御意見をいただければと思いますが、松田様、お願いできますでしょうか。

松田構成員

保護者の立場からお話しさせていただきます。

先ほど岩瀬先生がおっしゃったように、探究心というのは、小さいときはあったのです。うちの子にもすごくたくさんあって「これは何？」とたくさん言っていたのですが、小学生、中学生になってくると、なかなかそういう言葉も聞こえなくなってきたり、言わなくなったりということは、私自身感じる場所があります。それはどうしてなのだろうかと思っても、私に答えが出てこないのです。子供に伝えることもできない自分でもあるのですけれども、そういった探究心とか、探究するというのを続けていく。こういうものは、今すぐできるものではないと思います。

なので、基本理念の中では、もちろんこういうふうに『探究』『探究力』とは」ということを目標にしているのはとてもいいと思うのですが、言葉だけでは続かないというか、その中の内容が大事になってくるのではないかと考えております。

探究心、いろいろなことを経験したりということもあると思うのですが、意見交換の中でも、先ほどおっしゃったように、夢や好きなことを見つけるきっかけをたくさんつけてほしいという意見も子供・若者からということであったと思うのですが、身近な人から

伝えたいというか、あのうちのお母さんはああいう仕事をしている、ちょっと格好いいねとか、そういった気づきもあったりするので、地域の人の力は大事なのではないかと思います。

私も信州型コミュニティスクールの支援員をやっているのですが、地域の人との関わりが子供たちに重要になっていて、お母さん、お父さんから教えてもらえないようなことを地域のおじいちゃん、おばあちゃんに教えてもらったり、そこからこれこれこうだったということを私に教えてくれたりということが結構あるのですが、そういう地域の人に関わりを大事にしていっていただきたいと思います。先生方も授業の内容などがかなりいっぱい、やることがいっぱいあると思うので、先生方の負担を減らす意味でも、地域の人をもっとたくさん使っていただきたいと思います。

それには、私もちょっと考えるのですが、校長先生もそうですが、先生たちが早く替わり過ぎているのではないかと考えています。いつも3年ぐらいで先生たちはいなくなってしまうと、地域の人と先生たちが関わり合ったと思ったら、もういなくなってしまったということがすごくよくあって、そういうものはどうにかならないのかといつも思っているのですが、だから、そこでぷつと切れてしまって、また一から始まって、そこをまた説明してみたいなことが今までたくさんありました。

幸い私が行っているところは、次の方にもすぐ理解していただいて、またすぐにつなげてということができたので、意外とコミュニティーはしっかりしているのですが、そういうふうにはできないところもたくさんあると思うので、そういったことも変えられるようになったらいいのではないかと思います。これはすぐにどうにかなることではないと思うのですが、保護者としてはそういうふうには思いません。いつも替わってしまって残念だと思っています。

あと、先生たちの研修は先生たちでやると思うのですが、保護者もあるのです。PTAで活動していることがたくさんあるのですが、先生と保護者が一緒になってやることはあまりないのです。先生と保護者は多分同じようなことをやっていると思います。それを一緒にしてしまったほうが、先生も保護者の立場が分かるし、保護者も先生たちの立場が分かるし、私たちPTAはそういうことをすごく投げかけてはいるのですが、そこもしっかり連携ができるといいのではないかと思います。

ちょっと話がずれてしまって申し訳ないのですが、そういう意見です。

村松座長

ありがとうございました。探究心に関わって、言葉だけではなくて、内容が非常に大事だという御指摘、それから、地域の人との関わりのお話、今の先生方の人事の持続性のお話もありました。それから、先生と保護者が一緒という、探究者としての教師とともに、もしかしたら、そこに保護者も加わって、共にという話かもしれません。

今度、子供支援のお立場から西森様、いかがでしょうか。

西森構成員

お聞きして、いろいろ思うこともあるのですが、探究ということについて考えていること

ですが、松本には探究科のある県ヶ丘高校の学校評議員をさせていただいて、授業や、発表もを見せていただいたことがあります。子供たちが生き生きと自分の課題に取り組んでいるところとか、学校から飛び出してやっている子がいるところなどもたくさん見せていただいているので、探究という言葉で学校の背中を押して動き出したということはあると思うので、それは意味のあることだと思います。

『探究』『探究力』とは」と書いてあるところの「小さい子どもが」というところはとてもいいのですけれども、次にポツが四つあるのですが、これは探究のことを言い始めるより前に、どの小学校でも、中学校でも、高校でも、ずっと言ってきたことではないかと思います。ずっとこういうことを聞いてきて、各学校で今までやろうとしていたし、そういうことを要求されてきた力だと思うのですが、それをまとめて、今、探究とか、探究力と言っていると思うと、ちょっと水を差すようではございますけれども、今までやろうとしていて、できなかつたら、これからはできるようにしていきますということで、この探究を出してきているのか。先ほど教える教育をしてきたからできなかったということをおっしゃった先生もいらっしゃいましたけれども、なぜできなかったか、あるいはできたのは何かという、その検証がちゃんとできて、それを具体的なものにして提起していくことはすごく大事なことだと思います。

下のところの重点目標の例えばですけれども、校長が自由に外部人材登用をするとか、福祉分野との連携を深めるとか、こういうものがその反省の上に立ったものかもしれないのですが、こういうところをいっぱい打ち出していくことがこれから大事になってくるのではないかと思います。

それと、先ほどからどうやっていいか分からないとか、そういうことがあったのですが、学びが探究ということで一つのものをつくっていきこうとしたときに、マニュアルがつくられたり、サポートガイドがつくられたりということがよくあるのです。そうすると、探究しなければいけないと焦ってきて、追い詰められてきてということにならないかという危惧があります。

下のところに「社会変化に先行する資質を持つ教員を育成するには…」とあるのですけれども、確かに県ヶ丘の先生方の話を聞いていたら、コーディネーターとか、ファシリテーターとか、そういう力のある先生がいないと大変だ、先生たちがすごく大変だという話を聞くにつけ、育成とか、研修なども大事ですが、これで先生たちも子供たちもやれやれと追い立てられている感じで、ますます先生が大変になり忙しくなるし、子供はこうでなければいけないというようなところに誘導されて、枠にはめられていくことになると本末転倒で、そうすると、well-beingではなくなってしまうし、もっとおらかなものがほしいような気がします。

「小さい子どもがいつまでも飽きずに遊ぶように、自分の好きなこと、楽しいと思うことに、徹底的に浸り、追求すること」というところで、「徹底的に」という言葉がついてしまうと、途中でやめては駄目とか、中途半端では駄目なのか、何もしないのは駄目なのかという、そういう余裕の部分というか、そういうものがなくなっていってしまうような危惧があって、本当にうまくやらないと余計苦しくなってしまう。探究ということを前に出すことは反対ではないのですけれども、そういう気持ちが今しています。

村松座長

ありがとうございました。非常に重要な御指摘をいただきました。探究は非常に重要ですが、探究自体が目的化してしまうことの危惧と捉えたらよろしいでしょうか。ここは非常に大事な点だと思います。

また、探究、探究力といろいろ書かれているのですが、ここにあるものは今までも大事にしてきた点ではないか。これは先ほどのように、御年配の先生方が落ちないというところに、もしかしたらつながってくる視点だと感じました。

今度は教育行政のお立場から、近藤様、御意見をいただけますでしょうか。

近藤構成員

教育委員会という立場です。

今までのお話と幾つか重なるところもありますが、本県の義務教育では、探究という言葉はあまり使っておらず、課題解決学習とか、問題解決学習という言葉で、子供たちが自ら学習課題を設定して、互いに自らの考えを出し合って、課題を解決していくという、そういう形の授業を長野県では古くからやっていました。

ただ、私は、今までの授業には限界があって、どうしても教師側が課題を解決しやすいように指導案を作ってしまうため、限られた条件の中で子供たちが追求できなくなってしまうため、そうではない子たち、そこに乗れない子供たちというのは、置いてきぼりになってしまうことが往々にしてあるように最近思うようになってきているので、今までの問題解決学習とは違って、探究という意味が学習方法に広がってくるのではないかと思っています。

ただ、探究で全部知識の習得をやろうと考えてしまうと無理があるのではないかとも思います。そう言うと、ちょっと言い過ぎかとも思うのですが、ICTが進んできていますので、個別最適化で子供たちの理解力というか学習進度によってどんどん進めて良いのではないかとも思います。そして、先ほど岩瀬先生がおっしゃったように、学校では多くの子ども同士が協働して、そこで多様な意見を聞き合って、新たな価値をつくっていくことをやっていくと、そういうときこそ探究の力というか、これからの社会で必要とされるだろうと言われている探究力が培われるのだらうと思います。

やはり知識は必要だと思います。習得していく場もある。ただ、知識を習得するにも、探究をすれば、さらにそれより深い知識を習得するというスパイラルみたいなものが出てくると思うので、それをどれだけ先生方の中でこれからやっていけるのかという意味で、探究という広い意味で捉えていくと、探究という言葉をやっていくと well-being にもいくのだらうと思います。

ただ、私も教育委員会、行政という立場からですと、例えば自ら問いを見だし、その解決を目指し、仲間と協働しながらやっていくと、まず時間の制約をどうするか、自由進度学習でいいのか、もっと広いことをやらなければいけないのではないのか、それから、場所をどうしたらいいのかなど、多くの環境を整えなければならなくなるという問題があるように思います。

長野市のある中学校で、学年担任制ということを実践してみた結果、もしかしたら学年という枠も超えなければいけない場面も出てくることもあったとか。現行の学習指導要領の範疇ではないところで、学習が個別最適化になってきたときに、そういう保障もどういうふうに教育委員会としてはやっていったらいいのかということもあります。極論ですが、もしかすれば、今の6・3・3制を変えていかなければならないのではないかと考えると、そういうところまで含めて、子供たちが実際にwell-beingになるような環境を大きく考え直していく意味で、探究というのは相当県民の皆さんに理解してもらわなければならないのではないかと思います。

それから、松田さんが言われた、先生方は、教育課程の研究会を毎年行っています。それは今まで先生同士・仲間同士でやっていたのですが、これを地域の方・保護者の方と一緒にやって、私たちの学校ではどう子供を育てて、どう子供たちの指導というか、探究力をつけようとしているか、伸ばそうとしているのかということは、一緒にやっていくことが必要でしょうと呼びかけてはいるのですけれども、なかなか変わっていかないのが実情です。

ただ、探究にした一番の理由は、今まで一斉一律で先生が講義をして覚えろよという形を変えていきましょうというところに大きな狙いがあるのだらうと思うのですが、この探究というのは、小金先生がおっしゃったのは、そういうところだと思うのですけれども、そこへ子供たちがどういうふうに分ちあいで知恵を出し合って、解決していくかということを入れていくような学習に少しでもなるようにしていきましょうよという意味では、大きなインパクトがあるのではないかと思います。

まともらずに申し訳ございません。

村松座長

ありがとうございます。今、探究を進めていく中での知識習得、こういったものをどういうふうに位置づけていくか、大事にしていくか。また、時間、場所等の現実的な条件、要項、環境の制約、こういうものについてどんなふうを考えていくか。そして、一斉授業そのものをこれからどうやってそういう中で変えていくのか、その必要性のところをいただいたかと思えます。

ぜひ企業のお立場からもいただければと思いますが、ウェブのマキナリー様、よろしいでしょうか。

マキナリー構成員

マキナリーです。お願いいたします。

今回の基本理念についてですけれども、昔、長野県は教育県だと言われていて、今もよく言われているのですが、それだけの教育風土をつくってきたと思います。今回つくっている5か年計画というのは、新たな教育風土を構築していくものだと思います。

それを考えたとき、新たな教育風土をつくるということは、柱がしっかりとしていなければいけない。そして、徹底しないといけない。そして、分かりやすくなければいけないと感じています。その中で、新たなというところで、探究学習を中核に据えるというのは、私も

とても賛成です。今、探究学習というのは、物すごく注目を浴びているのですけれども、実際にどこまで成功するのか、具体的に探究学習とはどういうものなのかというところまで、基本方針の中できちっとイメージできるような、そういうものが必要だと思います。

探究学習、well-being、多様性、いろいろな言葉が飛び交っているのですが、どれも重要な言葉でありながらも、具体的に説明ができて、イメージできるかということ、なかなかできないのではないかと思います。ですから、基本理念のところは、イメージができて、言葉として分かりやすく、なおかつ、私は以前から子供の姿がイメージできるようにと思っています。

子供の姿というのは、もちろん子供一人一人に個性があるので、全員をこの姿にするということではないのですけれども、未来を担う人材として、どんな姿の子供たちになってほしいかということだと思います。保護者の立場からも、先生の立場からも、企業の立場からも、そして、長野県全体としてどんな姿になってほしいかということなので、全員を一様にするという意味ではないのですが、これから必要な人材はどんな人材ということを考えてみて、言葉にすることが非常に重要なのではないかと思います。

これからどういう人材が必要なのかというのは、学校のみで考えるよりも、むしろ私は企業人なのであれですが、先ほど高見澤社長の御発言にもありましたけれども、企業が欲しい人材、働きたいと思う人材、それは違うと思っています。なので、高見澤社長がおっしゃったように、長野県に帰ってきたくないと思う子供たちが多くいるのは、私も現実としてそれを聞いたことがあって、とても残念だと思います。

企業の方がどういう人材が欲しいのですかということと、教育が目指す人材をすり合わせていかないといけないと思います。そうでないと、いつまでたっても企業が欲しい人材と教育が目指している人材にずれがあって、企業に入ってからもう一度研修し直したりすることになるのではないかと思います。ですから、幼児教育から長野県が一貫して、企業が欲しい人材を学校教育の中で、公教育の中で、社会全体のソサエティーの中で育ててほしいと思いました。

そこら辺について、企業の方からヒアリングをする、高等教育の先生方からヒアリングをすることも必要なのではないかと考えております。そのヒアリングで出てきた姿にどう幼児教育、初等教育、中学校の教育でつなげていくかということが先生たちのとても大きな役割、ソサエティー、社会の大きな役割だと思います。そこ以降の柱をどうしていくのかということが必要だと思います。

そのためには、県全体として、県の教育委員会が決めたら、それを学校の現場もやる。あの学校はこうやっているからうちの学校はどうしようとか、そういう迷いがあると先ほど先生がおっしゃっていました。そういうことがないように、長野県の新しい教育風土はこうなのだ、だから、こういうふうにする。手法は多少違っていいけれども、目指すところは一緒という、ぶれないやり方が出てくるのではないかと思います。

あと、保護者の皆さんが学校にお預けしても、ありがたい姿が共通しているので、安心して任せられるところになる。それから、県民全体が分かりやすい言葉で、先ほどから何回も出ていたと思います。私もそれがとても重要だと思います。それを県の教育委員会が今回の政策で徹底して県全体の方針を決めて広げていく。ぶれないというところ、とてもユニー

くなものにしたらいいのではないかと思っています。心に刺さる言葉、易しく、分かりやすくということですが、言葉を選ぶのであれば、そういう言葉にしていく。

well-being というのは、今、確かにたくさん使われています。well-being を実際に説明しましょうといったときに、どれだけの人が説明できるかということ、なかなか説明ができない。well-being という言葉を使ってもいいと思うのですが、well-being とは何かというワークショップをやる、そういう研究会も必要なのではないかと思います。

今回の探究について、いろいろな資料を見せていただきましたけれども、今までもあったことです。でも、今回の5か年計画は何が違うのかといったときに、実行度だと思います。どれだけ実行できるか。今までずっと企業の方の話も聞きました。それから、教育現場の先生の話も伺いました。行政の方の話も聞きました。そこに成功していくソリューションがあると思います。今、皆さんの御意見の中から、どういうふうに課題を解決していく具体的に政策が立てられるか。そして、徹底していくかということがとても重要だと思います。

知識の習得と探究のバランスです。知識の習得は、今おっしゃったように、学校の現場から飛び出したものでもいいと思っています。オンラインでもいいし、個人の学びのやり方の中で知識を習得していく。ただし、知識の習得はゴールを明確にしてあげることも重要なのではないかと思います。そこは今まで日本の教育が大切にしてきたところだと思います。大切にしてきたがあまり、少しバランスが崩れてそちらに集中してしまった、傾いてしまったというところもあると思うのですが、ここも子供たちが学びやすいような環境、個人の進捗でできる環境を整えていきながら、探究学習にも結びつけていく。この二つの知識の習得と探究学習が非常にバランスよく、きちっと進められていく環境がつくられていますというのが、長野県のとても大きな特徴になっていくのではないかと思います。

ありがたい姿というのは、具体的にイメージできるものがないのではないかと考えているのですが、文科省も出していますし、経産省も出していますし、この資料も共有させていただいているのですが、経産省はこういうふうに言っているのです。「未来を牽引する人材が求められる。それは好きなことにのめり込んで豊かな発想や専門性を身に付け、多様な他者と協働しながら、新たな価値やビジョンを創造し、社会課題や生活課題に『新しい解』を生み出せる人材である。そうした人材は、『育てられる』のではなく、ある一定の環境の中で『自ら育つ』という視点が重要となる」と、経産省は言っています。

これは結構イメージしやすいと思ったのです。言葉の一つ一つも割と分かりやすい。しかも、「ある一定の環境の中で『自ら育つ』という視点が重要」だと最後に書いてあります。ある一定の環境づくりというところが、長野県の5か年計画のキーになるのではないかと思います。

私は経済界なので、これから長野県を発展させていく、日本を発展させていく、そういう人材をどんどん輩出していくような、徹底していける政策をつくっていただければいいと願っています。つくることが目的にならずに、その先にある実行、実施、そして、成功に導く具体的な政策を立てていただければいいと思っています。

以上です。ありがとうございました。

村松座長

ありがとうございました。今、お話をいただきました徹底、分かりやすくぶれないという方向です。子供の姿が具体的にイメージできる。それは子供だけではなくて、子供から企業までをつないだ、大人までをすり合わせていくという、経産省の例もお出しいただきながら、御説明をいただきました。

それでは、学術的なお立場からお話しただけであればと思いますが、北條様、お願いできますでしょうか。

北條構成員

駒澤大学経済学部の北條と申します。

身近な人が感染したり、あと、東京でもかなり感染者が増えているということで、ウェブでの参加とさせていただきます。よろしく願いいたします。

基本理念につきまして、私から3点ほどお話をさせていただきたいと思います。

まず基本理念として、探究というものを位置づけるということについては、私も賛成といえますか、方向性としてはいい方向なのではないかと考えていました。

ただ、今ほど様々な御意見をお聞きする中で、例えば探究という活動そのものが目的化してしまうような危険性であったり、あるいは資料2の中に出てきている well-being という言葉はなかなか分かりづらい部分があって、分かりやすく伝える必要があるというところをお聞きしておりますと、その辺の整理は必要だと感じました。

私なりの解釈というか、探究、well-being の関係性ですけれども、探究という活動を通して、例えば自ら問いを見いだして、その解決を目指して仲間と協働しながら新たな価値を創造する、そういった活動を通して身につける能力です。あるいはそういう活動の中で、将来、子供たちの well-being を達成するために必要な能力が身につけていくような関係性なのかと思いますので、その辺り、探究と well-being という言葉のつながりといえますか、その関係性を分かりやすく理念の中に位置づけることができればいいのではないかと考えております。

その点に関して付け加えといえますか、追加しておきますと、探究を通して個人の well-being を実現していく、生徒たちの well-being を実現していくという話になりますと、どうしても未来を見据えたといえますか、将来、子供たちが生きていくのに必要な能力を探究を通して身につけていくというような、そういう時間軸といえますか、話になってこようかと思うのですけれども、同時に理念の中にどれだけ位置づけられるか分かりませんが、将来の well-being だけではなくて、今、学校で学んでいる子供たちの well-being も同時に達成していくという視点が必要なのではないかと考えております。将来必要だからという理由だといまいち響かないというか、そうではなくて、今の well-being の達成のためにも探究が大事な活動だというメッセージの中に入れられれば、より分かりやすくなるのではないかと感じております。

探究という活動を中心的に位置づけるとなると、特に私が専門としている経済学の立場からいうと、探究活動はかなり意欲とか、探究心、好奇心みたいなものが活動への取組を左右

する大きな要因になってくると思うのですけれども、そこで気になるのは、意欲とか、探究心の格差みたいなものです。単にそういう探究活動が好きだとか、たくさん興味を持っている子供とそうではない子供がいるというだけではなくて、その背後には家庭環境であったり、経済状況であったり、そういう困難な状況で生きている子供ほど、探究心を持ちづらいとか、好奇心を持ちづらいという傾向はあると思いますので、その辺りの探究活動を積極的に進めていく上で、探究心を持ちづらい子供へのサポートといいますか、単に生徒個人の資質とかではなくて、その裏側には家庭的な背景があるのだという前提でのサポートみたいなものを、理念ではないかもしれないのですけれども、重点目標なり何なり、ある程度高い位置のところに組み込んでいく必要があるのではないかと考えております。それが2点目です。

3点目ですけれども、こういった探究活動を中心に据えていく中で、先ほどいろいろ御意見が出ていましたが、先生というのが一つの鍵になってくると思いますか、言い方には語弊があるかもしれませんが、探究活動は子供たちが自主的にとといいますか、課題を自主的に設定して、そして、探究活動を進めていく。ある種、子供主導といいますか、そういう活動だと考えられるのですけれども、そうだとすると、意欲を持ちにくいとか、探究心を持ちにくい子供はどんどん置いてきぼりになっていくというか、家庭環境に恵まれて、探究心にも旺盛な子供との差がどんどん広がっていく。そういうときに大事なのが先生のサポートというか、そういった部分になってくるのだと思います。なので、探究という活動を中核に据えてというときに、先生、あるいは学校の役割が大事になってくるのではないかと思います。

先生の役割が高まるということに加えまして、昨今、言われているのは、教員の働き方改革であったり、学校の先生方は過酷な環境で働かれているということが問題にもなっておりますので、これはあくまで例えばといいますか、あれですけれども、生徒たちの well-being を理念に掲げるのであれば、同時に先生の well-being も理念の中に埋め込んでいけば、先生も学校の構成員として非常に重要なプレーヤーで、その先生たちが well-being を達成できないことには、子供たちの well-being も達成できないだろうという、それぐらいの大胆な視点を理念の中に入れ込んでもいいと考えておりました。

以上です。よろしく願いいたします。

村松座長

ありがとうございました。御指摘にありました、探究と well-being の関係性をどう明示していくのか。未来の話だけではなくて、現在の子供たちの well-being、さらには先生方の well-being、こういうものも非常に大事だという御指摘、そして、格差への対応といったお話があったかと思えます。

最後に荒井様、お願いできますでしょうか。

荒井構成員

失礼します。私から3点ほどお話しさせていただきたいと思っています。

一つ目は、探究に関する資質・能力に関してですが、探究「力」とつくると本来豊潤な意味を有する「探究」の概念が測定可能なものというニュアンスで一気に陳腐化する印象を与えて

しまう可能性があることを危惧しています。先ほど岩瀬構成員がおっしゃられていた探究「心」という、いわゆる情動的な側面に対して多くの方が期待をお持ちかと思いますが、探究「力」というフレーズを使うことで、要件主義的、チェックリスト主義的に偏重することになる危険性に関してはより自覚的である必要があると思います。

二つ目は、基本理念が難しい場合、重点目標に位置付けていただくこともご検討いただきたいのですが、今回の資料の中では、現場で尽力されている教職員に対する記述がほとんど出ておりません。先ほどから共同生活者、協働探究者、あるいは探究伴走者といった立場についてのご発言もありましたが、生涯探究者としての教員、特に、教職員の well-being についての視点も忘れてはならないことではないかと思ひますし、このことは現場の教職員の士気を左右することになると思ひます。

三つ目は、基本理念に関してですが、信州教育の真髄は、「革新」という名の伝統を重んじており、そこでの「革新」は多様性や異質性から生まれてくるという認識にあったのではないかと思ひています。

そのことを踏まえて、今回の資料に記載されている「出る杭を育む」というのはフレーズはとても興味深く受け止めました。基本理念に関しては、何を誰がどのようにしていくのかをわかりやすく据えた方がいいと思ひますが、産業界や現場からの願ひ、さらには多様な個性を有するお子さんに寄り添っている保護者の皆様、教職員や教育関係者の皆様にとって施策の方向性がイメージしやすいことが重要かと思ひます。この意味では、他の都道府県や自治体で使い古されたフレーズを使っていくよりも、「出る杭を社会で育み、支える探究県 長野」といったように、どのような主体が何に対してどのようなアクションを行っていくのか、そしてそこでの県はどのような性格を有する県なのかが伝わるものがないのではないかと思ひます。

以上です。

村松座長

ありがとうございました。探究力について、資質・能力にシフトし過ぎることの危険性を御提示いただきました。それから、生涯探究者の先生のほうにぜひフォーカスをしていただきたいということ、最後に出る杭を社会で育むという、具体的な御提言等もいただきました。

今、ざっと構成員の皆様から御意見をいただきました。まず理念の探究につきましては、探究心が非常に大事であるということ、それから、教師自身も探究者である、またそこに保護者、そういう者が関わっていく。学習観の転換としても、探究というのは、皆さん、おおむね賛同を得られたのではないかと思ひます。

ただ、一方で、探究自体が目的になっていくことの危険性であったり、今、御指摘いただきましたように、資質・能力にシフトし過ぎることの注意点などもいただいたかと思ひます。

もう一方の well-being につきましても、個人と社会との両立であったり、探究と well-being の関係性を検討すること、未来と現在、両方の well-being が大事、格差の話も含めまして話が出てきました。そして、先生の well-being も考えなければいけないのではないかと。well-being についても、様々出ました。

伝え方のところでも、言葉としてはいいのだけれども、これをどうやって県民の皆さんに共有していくのか、分かりやすくイメージできるのかというのはより大きな課題で、子供たちの姿、先ほどいただいたようなキャッチフレーズのような形で検討できていければと思います。

基本理念に時間をかなり割かせていただきましたが、ここまでのところで、全体を通しまして、もし足りなかったこと等がございましたら、お願いいたします。どうぞ。

西森構成員

well-being について感じていることですが、重点目標の上の「【個人】」のところ、「一人ひとりの存在やいのち、人権や個性が当たり前で尊重され、自分らしく自分が生きたいように生きること」というのは、すごく大切なことだと思うのですが、文科省が6月10日に出した通知には、教育機会確保法のことをちゃんと周知され、それが浸透されるようにということが出ています。このあいだの6月15日には、国会でこども基本法が成立しました。こども基本法と教育機会確保法の二つを押さえたところをぜひ入れてほしいと思っています。

この間、相談に来たお母さん小学校5年生のお母さんでした。学校へ行きたくないと言うので、今は学校復帰ではなくて、多様な学びの場で学びをと言われていますがと、教頭先生に聞いたわけです。そうしたら、教頭先生は、そんなことを言っても本音はまだまだ学校ですから、中学だと評点が見つからないから進学先に制約がつきます、制度的にはトップクラスの高校進学はあり得ないと言われて帰ってきたというのです。そこで、今度は校長先生に相談したら、やはり同じことを言われたということです。

こういう話はたくさんあって、学校以外の場所で学んでもいい。だけれども、自己負担・自己責任でね。という状態は全然変わっていないし、例えばそれを訴えた保護者は、それなら学校へ来ればいいのですと言われてたりする。このような話は、私はたくさん相談を受けています。法律の趣旨が具体的に生かされていないということと、実現するための施策がほとんどないのではないかと。それどころか、考え方自体も変わってなくて、それにいつも驚くのですけれども、先生たちもこう言わざるを得ないような状況にあるのはなぜかということを中心に考えていかなければいけないと思います。

私は法律と現実のギャップを埋めてほしい。埋められるような方向性とか、施策をぜひ基本計画の中に入れていってほしいと思っています。重点目標では一人の子供も取り残さないと言っています。言葉は違うのですが、今までもそういうふうに出てきたのだけれども、多様な学びとか、多様なということが出てきて、人間としての差別化がもっと出てきたような状況が現実の問題としてあるので、どういうふうにして人権感覚を獲得していくかというのはすごく問題だし、それが一番大切だと思うので、well-being はそこがすごく大事なのではないかと思います。探究も大事だし、弱い立場とのギャップが今あるということ、ここで入れていってほしいと思います。

村松座長

ありがとうございました。先ほど格差のお話もありましたけれども、今のお話もそういっ

た多様な子供たちそれぞれに手が差し伸べられるような、具体的な施策に反映してほしいといった御意見だったと思います。これも非常に大事な視点でありますので、検討していきたいと思います。

よろしいでしょうか。どうぞ。申し訳ございませんが、短めでお願いいたします。

マキナリー構成員

これまでの話合いの先生方から出てきた言葉の中で、同調圧力という言葉がたくさん出てきたと思います。同調圧力の排除はとても大きな課題だと思っていて、そして、基本理念の言葉をつくる際に、先ほど荒井先生からもお話があった出る杭というところは、私もその言葉はすごく好きなのですけれども、企業も出る杭を求めています。

出る杭はいいということ、出る杭、個性はいい、個性は大切だ、自分らしくいられるということが分かるような基本理念にさせていただけると、同調圧力の排除にもつながっていくのではないかと思います。同調圧力の排除という、そこを言葉にする必要はないのですけれども、それを感じられるものができたらいいと思いました。

村松座長

ありがとうございます。個性を育むという点で非常に大事な点だと思います。ぜひ検討に入れていきたいと思います。

ここまでいただいた御意見、それから方向性等を踏まえまして、理念は具体的なまとめに入っていきたいと思います。

それでは、残された時間は僅かになってしまいましたが、こちらを具体的にどのように計画として構成していくのかという、資料2に入っていきたいと思います。

「○例えば…」というところで例示があります。冒頭の御説明で、幾つかの市、他県等でも例があるとございました。私も日野市さんとか幾つか例を見たことがございますので、もしその辺の例示を、事務局で御提示可能でしたらお願いできればと思いますが、よろしく願います。

日野市のものは、裏表の2枚物でまとめられておりまして「自らの羅針盤を自らが育んでいく みんなが育って 自分も育って」という、ここに全部集約して、細かい説明をせずにざっとまとめていく。両脇にいろいろな教育機関がそれぞれ出ております。全ての命がつくっていくということです。「つくっていくわくわくの学び合い 育ち合い ひのデザイン」です。どういった方向を示すのかということを端的にまとめているのが、日野市さんの例でございます。

もう一つございますか。戸田市さんです。戸田市さんのほうも非常にコンパクトにまとめられておりまして、日野市さんほどビジュアルではないのですけれども、端的にまとめております。基本理念「生き生きと 共に育む 教育のまち 戸田」ということで、キャッチフレーズは「～とだっ子 やり抜く力で 未来に夢を～」というように、方針等も1枚物、こんな形でざっとまとめているような、こんな例でございます。

後ほど詳しく御覧いただければと思いますけれども、この辺は事務局とも一応議論しまし

て、本日もいろいろと御意見をいただいたのですけれども、いかに分かりやすく県民の皆さんに伝えていくのか。厚い施策の計画書だけではなかなか伝わらない。そこをどうやっていけばいいのかということで、幾つか例もこんな形でお見せいたしました。

この辺の計画の構成につきまして、ぜひ皆様から御意見をいただければと思います。ここは自由に御意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。こんな形でどうだとか、こんな方向でどうだろうみたいなものがありましたら、ぜひお願いいたします。いかがでしょうか。岩瀬さん、お願いします。

岩瀬構成員

軽井沢風越学園の岩瀬です。

日野市は2018年からずっと関わっていて、風越学園は2年間の連携協定で2名の教員派遣があり、昨年度で教員派遣は終わりましたが、今年度から新たに2年間の連携協定を結んでいます。

第3次日野市学校教育基本構想のパンフレットは、内容もとてもいいと思うのですけれども、何よりもその後にごく読まれ大切にされている工夫があります。保護者が集まる場でも読まれていたり、教員研修でも読まれていて、教員間でどうやって第3次構想を実現するかという言葉が出てくるぐらい、それぞれの気持ちをのせているところが優れていると思っています。そういう意味で、読んでみたくなったり、読んだことが、保護者にとっても、教員にとっても自分とつながりを感じられるものになっていると思います。

施策をどう表していいかという案はないのですけれども、日野の研修では、毎回のように第3次構想の話を取り扱っています。参加者もパンフレットを持ってくるなど身近になる工夫は参考にしたいですね。できた計画を「どうやって実現するか」が共通言語になるような展開になるといいと思います。

構想の読み手を誰にするのかというのは結構大事で、硬くすればするほど読み手がいなくなってしまう、行政文書になってしまうので、先生だったり、保護者だったり、行政の方も含めて、読み手を意識したものに出来上がることを強く望んでいます。

村松座長

ありがとうございました。今、御指摘いただいた読み手を意識してというのは、非常に重要な御指摘かと思います。

せっかくですので、岩瀬さん、もう少し今のことで、日野市に関わっていることを補足いただければと思います。特に読み手を意識したということで、構成等に関わって、もし重点を置かれていることがありましたら、教えていただければと思いますが、どうでしょうか。

岩瀬構成員

一つ目は、つくるプロセス、あるいは読んで自分に染み込ませるプロセスに、保護者とか、教員を交えて、対話の場をたくさん設けることが大切ではないでしょうか。日野のパンフレ

ットにもさまざまなところで出た声の下のところに出ています。真ん中の下です。出てきた言葉なども載せてあるので、この策定に関わったという当事者性を持っている人がかなり多いと思います。

二つ目としては、掲げていることを実現するために三つの柱を立てていて、一つ目は「一律一斉の学びから、自分に合った多様な学びと学び方へ」、二つ目が「自分たちで考え語り合いながら生み出す学び合いと活動へ」、三つ目が「わくわくが広がっていく環境のデザインへ」、多分それは裏に書かれている要素だと思います。こういうふうシンプルになっているので、先生たちもこれを実現するにはどうするといいいのかということが分かりやすかったということがあります。

私が研修を引き受ける際に、第3次構想に絡めて話をしてほしいということは毎回言われますし、教育長や指導主事さんもこれをどうやったら実現できるかということがいつも施策を考えるときの柱になっていますので、そういった意味でみんなの思いをのせた優れたものになっていると思います。

村松座長

ありがとうございました。

今のことを受けまして、ほかの方々、構成員の皆様、御意見等はいかがでしょう。特にそれぞれのお立場からいかがでしょう。どうぞ。

松谷構成員

関わった意見になるかどうか分からないのですが、自由進度をやっている先生に聞いたことですが、それをやることによって、いじめ問題、不登校の問題、直接ではないのだけれども、改善されてきているような気がするということを言っていました。学習の仕方を変える、授業を変えていくことによって、子供たちの幸せになっているし、また、授業を語り合う、要するにいじめ問題が起きれば、私たち教員はその対応について非常に苦慮します。例えば不登校のお子さんが来れば、どうしようということで苦労します。でも、学びを変えることによって、それらの改善につながっていています。そうすると、先ほどあった先生たちの well-being にもつながってくるし、うちの学校でも授業で子供たちとやり取りをすることは、子供たちで授業のことを語り合うのはうれしい、楽しいということをお話します。一方、生徒指導の問題を語り合うと、だんだん落ち込んできてしまいます。

そこにも書いてあるように、どういう授業を私たち学校がしていけば、幸せになるのだろうかということをしっかり具体的に打ち出していくことが大事だと思います。探究という言葉だけで押していってしまうと、学校の先生は引いていってしまうようなところがあります。何をやればいいのかと悩んでいって、また新しいことになってしまう。そうではなくて、学びの形を少しずつ変えることによって、こんなに幸せになるのだ、個々の学びを保障することで、子供の幸せ、私たちの幸せがあるということが分かっていくような気がします。

例えば5章の探究的学びについてというところに、どっと書かれているのですが、

これを書かれてしまうと、私もイメージがつかないし、どんなふうを書くのだろうということになりますので、シンプルで、学校職員が読んで、こういう学び、こういう授業を私たちはしていきたいというところを前面に出していただけると大変ありがたいですし、それで私たちも学校の職員をやっていけると思います。

村松座長

ありがとうございました。非常にシンプルにやっていく、それから、授業づくりなども含めまして、施策がどういうふうに最終的に well-being につながっていくのか、そういった関連なども明確に示していく必要があるという御指摘だったと思います。

そのほか、いかがでしょうか。どうぞ。

松嶋構成員

今、日野市のパンフレットを見ている中で気づいたといいますか、感じたことですが、今、画面に映っているところの三つの方向性といいますか、やろうとしている取組の後ろに、白くてあれですが、「対話」というキーワードが入っていて、例えば長野県が探究ということを大事にしてこうというときに、一人一人が何をするのか、何を意識してやっていくかというときに、読み取りが合っているかどうかはあれですが、一人一人みんなで対話を大事にしていこうというものが読み取れます。私たちが探究ということを進めていくとすれば、自分は何を大事にしてそこに関わっていくのかということが見えてくるような、そんな示し方もいいのかと、それを見ていて思いました。

村松座長

ありがとうございました。探究をつないでいくような示し方、今「対話」を例にございましたけれども、こういった方向も検討してみたいと思います。

そのほか、いかがでしょうか。

方向としてはどうでしょうか。日野市をそのままということではありませんけれども、こういう形で非常にコンパクトにまとめて、県民の皆さんに提示していく方向については、御賛同いただけるということでもよろしいでしょうか。

そうしましたら「○例えば…」という例を具体的にどう落とし込むのかというのは、もう少し議論がありますけれども、今回の場合は厚い計画書というよりも、コンパクトに、そして、今日いただいた議論を踏まえて、県民の皆さんがイメージできるような形の計画書の構成を検討してみたいと思います。ありがとうございました。

(3) その他

村松座長

時間もそろそろ終わりになってまいりました。全体を通しまして、これはもうちょっと検討してもらえないか、これを課題にってもらえないかということがもしございましたら、最後にいただければと思いますが、よろしいでしょうか。ありがとうございました。

本日は、様々なお立場から、今回の基本理念を中心にいろんな御意見をいただきました。また、本日の意見を踏まえた上で、再度、事務局で整理をいただきまして、次回、さらに議論を深めていきたいと思っております。本日はありがとうございました。

それでは、司会を事務局へお返ししたいと思います。

上平企画幹

村松座長、ありがとうございました。

閉会に当たりまして、長野県教育委員会教育長、内堀からお礼を申し上げます。

内堀教育長

皆さん、長時間にわたりまして、いろんな角度から熱い議論をしていただきまして、ありがとうございました。

本日の議論を聞きながら、つくっていくプロセスを大事にしていくということが改めて大事だと感じたところです。学校という存在も、サービス業であって誰かが一方的に提供するものになっていくと、享受する側は、どうしても商品として学校を見るようになっていくと思います。この計画もそうですけれども、県教委がつくってぼんと出すということだと、受け取る側は与えられたものとして受け取ると感じました。

教育委員会でも、共に学び、共につくるという「共学・共創」を大事にしていきたいと申し上げておりますので、この計画についても、そういった理念を大切にしながらつくっていったらと思います。

この会も引き続き、次回、次々回と続きますけれども、またすばらしい御意見をいただけますようよろしく申し上げて、むすびの言葉とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

上平企画幹

それでは、最後に事務局から3点、御連絡を申し上げます。

1点目は、本日の議論の内容につきまして、7月8日の総合教育会議で知事と教育委員の皆さんに情報共有させていただきます。また、ゲストスピーカーとして合田審議官をお招きしまして、意見交換していただく予定です。会議の概要については、随時、情報提供させていただきます。

2点目は、次回日程でございます。8月下旬から9月上旬に開催したいと考えております。場所は長野県庁を予定しております。詳細な日程調整は、改めて御連絡いたしますので、よろしく願いいたします。

3点目、最後ですが、有識者の皆様には、先月、個別に状況報告させていただいた際に、多くの視点から御意見をいただきました。ありがとうございました。今回も限られた時間で御議論であったということもございまして、次回の懇談会開催までに、再度、個別にお話しさせていただく機会を設けたいと考えております。日程は改めて御相談させていただきますが、御了承ください。

連絡事項は以上でございます。

4 閉 会

上平企画幹

有識者の皆様、本日はありがとうございました。お疲れさまでした。気をつけてお帰りください。

(了)